1
傾きし
赤き華表に夕日さして
古き社に
松葉こぼるる

2
鍬うてば
力つたわり土に入る
音ききなれて
老いもえ知らず

3
あらがわず
わがいうことにおん耳を
かしたまう故
母よかなしき

4
故郷に
来れば小さしわが影も
われをめぐれる
父母の影も

5
いまのこと
誠ならずはこの後に
起らんことも
われに要なし

6
知らぬ人
わが家に来て妻となり
母となる日の
おもいさみしき

7
荒き土
たがやしつつもつつましう
物など思い
日送る人よ

8
毛の国は
野焼き山焼き火のけむり
昼も見ている
もの静けさよ

9
わが心
絶えずはぐくむあるものを
疑うほどに
丈のびてきぬ

10
わが知らぬ
ひまに我まく光かと
遠稲妻を
野に立ちて見き

11
凡人の
中にわれ見しおどろきと
いたむ心と
絶えず身をかむ

12
手の職を
伯父はおぼえて独り身の
心安さに
家を明けにき

13
黙しつつ
はたらく父をうとましく
思いし我は
まだ若かりき

14
かえり来れば
はや夕づける玄関に
米俵ひとつ
おかれてありけり

15
くにの父が
かたくかけたる米俵の
縄の結びは
解けがてなくに

16
父のもと
離れてひさしく東京に
住みたりと思う
この夕べかも

17
わら灰を
火鉢に入れてこころ美し
今宵あきらけき
明星見たり

18
この家に
かえり来らばかならずや
母に会わんと
たのみつるものを

19
帰り来れば
母なき家は事を繁み
父は水田に
代掻きいます

20
一株の
あやめのこして田のくろの
泥ぬりたるは
父にかもあらん

21
亡き母と
ともに蒔きけん畠の麻
いまは伸びつつ
人の身かくす

22
寂しさは
まぎるる術なし常日頃
言葉少なき
父と知りつつ

23
いくたびか
母あらぬ嘆きするものぞ
夕げの膳に
一人欠けたり

24
いまはひとりの
父によくせよと弟に
手紙書きつつ
筆渋りたり

25
かくばかり
わが恋いわたる故里の
家には母の
ましまさぬかも

26
ときおりは
生命さびしくおもい至る
この世に生きて
今や母なし

27
故郷に
手紙は書けどつつしみて
亡き母の上に
言い及ぼさず

28
遊ぶ日の
ともしき我や故里の
家にかえりて
おもうことなし

29
この家に
かえりくることまれになりて
珍らしみ見る
背戸の杉山

30
奥の間に
子を寝かしめていろりべに
父と語る夜は
更けずもあらなん

31
夜となれば
さすがに遊び疲れたる
吾子は寄り来も
わが膝の辺に

32
遠くより
バスの中まで聞えたる
太鼓ばやしの
そば通りすぐ

33
よき友と
バスに座席をしめにけり
七八里がほどは
夜道もよけん

34
太鼓ばやし
習える村の若ものを
荒れたる堂に
見るはふさわし

35
軒並みに
ちょうちんともり夜祭りの
宿場の道を
人は往き来す

36
恐しき
雷の記憶うすらぎて
故里の夏
すがしみ思う

37
正午すぎて
日光の方より鳴り出づる
雷は大方
烈しかりにき

38
雷といえば
いたくおびゆる末の子を
あわれと思えど
時におかしき

39
弟の
生まれて後は独り身の
伯父に夜なよな
抱かれて寝き

40
連れられて
男体山にのぼりしは
十の歳なりき
伯父も若かりき

41
朝しばし
晴るる日光連山を
子らに見せしん
家の裏に出て

42
寄せてひく
浪のあとより現わるる
磯の傾き
大いなるかも

43
土手の上に
洗いあげたる白菜は
トラックの来て
ゆうべ積み行く

44
西日うする
向いの土手に晒布
人の出て来て
取りこみはじむ

45
日の暮に
河原に遊ぶ子どもらよ
砂利ふるう人より
遠くは去らず

46
つぎの村へ
山路越ゆると沿いてきて
羨しかりにし
川にわかれぬ

47
着飾れる
おとめ子を道に追いこして
入りゆく村は
秋祭りなり

48
川下に
さだかに見えている橋に
まだしと思う
電灯ともる

49
学校へ
往き来としてはこの橋を
かならず渡る
子等の愛しも

50
家の裏に
のこれる雪を踏みしめて
ひとり遊べり
村の子どもは

51
松山の
松にまじれる山ざくら
あわれと思う
ひとり来りて

52
笹鳴きを
わが聞きとめて透かし見る
藪の中には
芽ぶきたる木あり

53
朝な朝な
研ぎ水ながす井戸の辺の
山しょうの木も
芽ぶきたるかな

54
妻子らを
海辺へやりて朝なさな
戸をわずか開き
新聞を読む

55
若き日の
面かげのこる親しさよ
高原列車より
おり立てる君

56
山かげに
消のこる雪をふみさくみ
いまかえりぬと
母に申さな

57
ふる里の
大きないろりにい寄りつつ
こころくつろげ
語り出ずるかも

58
日の暮れを
ひそかには降る時雨のおと
われまずききて
炉にあたりいる

59
ふる里の
家の門みち長ければ
ゆきかえりみつ
日の暮れがたを

60
夕暮を
こぼれ雨してほど経たり
寒き月夜と
なりにけらしも

61
夕近き
山かげ小田にうごく人
ますかし見れば
土はこびいる

62
たまさかに
古里にかえり父母と
おなじ家にねつ
寒き夜ごろを

63
古里の
家に見なれぬ白き鶏
わが在らぬ間に
生まれけんかも

64
君が家に
ひと夜いねつ起きざまに
麦のはたけを
見らくたぬしも

65
子を抱きて
いろりべに寄る夜のくだち
言葉すくなく
なりにけるかも

66
つばらかに
言は申さね父母の
前に坐りて
茶をすするわれは

67
起き出でて
今朝はおとなしわが子ども
われと並びて
雪をみるかも

68
おさな子が
吾にいいかくる片言も
ききのがしがたし
家離りくれば

69
立ちどまり
我を見あぐる幼子を
すかし歩ます
路は長しも

70
東京ゆ
おくり越したる種物の
封も切らずに
死にたりというか

71
古里の家ちかづきぬ
いそぎ啼く
ひぐらしの声を
さびしとはきく

72
雀の子
鳴き交わしいるあかときを
めざめてきけば
雨やみて居る

73
夕はやく
あちこちにともる家の灯を
この原にきて
見まもるわれは

74
西空に
昼より立てる雲の峰
月夜となりて
未だ残れり

75
しくしくに
秋雨ふればにごり水
牧場にたまり
牛もあそばず

76
鉄叩く
音もここにはきこえ来ず
牡丹の花は
おおらかにひらく

77
この原ゆ
ただにそばたつ男体の
山をかしこみ
草に坐てあおぐ

78
子どもらを
ところ定めて寝させし
かやの裾辺に
我は坐るも

79
子どもらは
遊ぶところに事欠かず
焼土の上に
騒ぎ遊べる

80
バラックに
遊ぶ室無み子どもらは
通りに出でて
今宵遊べる

81
古里に
父が残ししそこばくの
畑をいまだ
見にも帰らず

82
つぎつぎに
見えてくる灯を誰々の
家のと知りて
村の道ゆく

83
ただ一首の
歌にその名をとどめたる
わが下野の
今奉部与曽布

84
波の音
時に聞ゆることあれど
眼のゆく先は
冬枯れの山

85
五月びな
わずか並べて売る店の
晴れがましさよ
田舎町にて

86
道にあいて
ひとおじをせぬ花嫁の
やや老けいしを
誰となくゆう

87
谷の上の
空は暮れても明かりあり
あかるきうちに
道をいそがん

88
二年間の
浪人生活をかえりみて
切なかりしと
面伏する子よ

89
わが影が
路上に淡くうつるまで
五日の月は
光りそめたり

90
いずくにて
生まれたるものか東京の
吾家の庭に
過ぎる蛍は

91
たわやすく
雲のあつまる秋空を
みなみに渡る
群鳥のこえ

92
縁側の
日向を追いて書き物の
机移さん
日のかげるまで

93
池に飼う
二三百の鮎一方に
頭をむけて
うごかぬ時あり

94
父母を
おきてかの世に先立ちし
子のあわれさは
言うべくもなし

95
桃の花
わが枕辺にさしてより
葉は萌えいずる
あわれなりけり

96
子の臨終
静かなりきと聞くだにも
目頭熱く
なりて涙す

97
みんなみの
空にむかいて吾子の名を
幾たびよばば
心足りなん

98
一夜寝ば
明日は明日とて新しき
日の照るらんを
何か嘆かん

99
東京より
見ゆる山々百余座と
数うる中に
故郷の山もあり

100
二階より
見おろす庭に露霜は
繁くなりつつ
吾癒えんとす

ふるきやしろにまつばこぼるる

ははとなるひのおもいさみしき

いたむこころとたえずみをかむ

すみたりとおもうこのゆうべかも

いまはのびつつひとのみかくす

おときなれておいもえしらず

ものなどおもいひおくるひとよ

こころやすさにいえをあけにき

こよいあきらけきあけぼしみたり

ことばすくなきちちとしりつつ

かしたまうゆえははよかなしき

ひるもみているものしずけさよ

おもいしわれはまだわかりき

ははにあわんとたのみつるものを

ゆうげのぜんにひとりかけたり

われをめぐれるちちははのかげも

うたがうほどにたけのびてきぬ

こめだわらひとつおかれてありけり

ちちはみずたにしろかきいます

てがみかきつつふでしぶりたり

おこらんこともわれにようなし

とおいなずまをのにたちてみき

なわのむすびはとけがてなくに

どろぬりたるはちちにかもあらん

いえにははのましまさぬかも

このよにいきていまやははなし

あこはよりきもわがひざのあたりに

ふるさとのなつすがしみおもう

こらにみせしんいえのうらにでて

うらやましかりにしかわにわかれぬ

なきははのえにいいおよぼさず

たいこばやしのそばとおりすぐ

かみなりはおおかたはげしかりにき

いそのかたむきおおいなるかも

いりゆくむらはあきまつりなり

いえにかえりておもうことなし

しちはちりがほどはよみちもよけん

あわれとおもえどときにおかしき

トラックのきてゆうべつみゆく

まだしとおもうでんとうともる

めずらしみみるせどのすぎやま

あれたるどうにみるはふさわし

おじによなよないだかれてねき

ひとのでてきてとりこみはじむ

かならずわたるこらのいとしも

ちちとかたるよはふけずもあらなん

しゅくばのみちをひとはゆききす

とうのとしなりきおじもわかりき

じゃりふるうひとよりとおくはさらず

ひとりあそべりむらのこどもは

あわれとおもうひとりきたりて

いまかえりぬとははにもうさな

ますかしみればつちはこびいる

まえにすわりてちゃをすするわれは

ひぐらしのこえをさびしとはきく

やぶのなかにはめぶきたるきあり

こころくつろげかたりいずるかも

おなじやにねつさむきよごろを

われとならびてゆきをみるかも

めざめてきけばあめやみている

さんしょうのきもめぶきたるかな

われまずきてろにあたりいる

わがあらぬまにうまれけんかも

ききのがしがたしいえさかりくれば

このはらにきてみまもるわれは

とをわずかひらきしんぶんをよむ

ゆきかえりみつひのくれがたを

むぎのはたけをみらくたぬしも

すかしあゆますみちはながしも

つきよとなりていまだのこれり

こうげんれっしゃよりおりたてるきみ

さむきつきよとなりにけらしも

ことばすくなくなりにけるかも

ふうもきらずにしにたりというか

まきばにたまりうしもあそばず

ぼたんのはなはおおらかにひらく

はたけをいまだみにもかえらず

ややふけいしをだれとなくゆう

みなみにわたるむらとりのこえ

めがしらあつくなりてなみだす

やまをかしこみくさにいてあおぐ

いえのとしりてむらのみちゆく

あかるきうちにみちをいそがん

つくえうつさんひのかげるまで

いくたびよばばこころたりなん

かやのすそべにわれはすわるも

わがしもつけのいままつりべのよそふ

せつなかりしとおもふするこよ

あたまをむけてうごかぬときあり

ひのてるらんをなにかなげかん

しょうどのうえにさわぎあそべる

めのゆくさきはふゆがれのやま

いつかのつきはひかりそめたり

このあわれさはいうべくもなし

かぞうるなかにこきょうのやまもあり

とおりにいでてこよいあそべる

はれがましさよいなかまちにて

わがやのにわにすぎるほたるは

ははもえいずるあわれなりけり

しじくなりつつわれいえんとす